

教育研究業績

2022年5月1日

氏名 菅原 育子

研究分野	学位
対人関係の社会心理学、老年社会学	博士（社会心理学）

研究内容のキーワード

対人関係、ソーシャル・サポート、社会参加、コミュニティ、幸福感・主観的ウェルビーイング

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
実践女子大学「コミュニティ心理学」	2016/9～ 2020/3	コミュニティ心理学の概念、理論、研究方法を講義で学ぶとともに、職場・地域・学校等様々なコミュニティを題材に、人と社会のウェルビーイングを高める実践例をグループワークにて学びあう授業を行った。少人数でのグループワークでは、講義で学んだ内容に関連する実践例を調べる、調べた事例についてディスカッションをする、実践例を踏まえて新しいプログラムを考案し発表する、等を行った。
東京大学大学院横断型教育プログラム「ジェロントロジー（老年学）」	2015/6/1～ 2021/3	複数の研究科所属の学生が受講可能な横断型プログラムにて、講義・演習を担当。社会心理学、社会老年学の立場から、高齢者の社会とのつながりや参加に関する講義、地域在住高齢者を対象としたフィールドワークや高齢者とその家族を対象とした意識調査等を実施した。
2 作成した教科書、教材		
「女性のからだところ-自分らしく生きるための絆をもとめて」共同執筆（うち1章を秋山弘子教授と共同担当）	2012/4	女性の体と心の生涯を通じた発達、暮らしをテーマにした教科書の一章を執筆した。本書は、十文字学園女子大学の全学ゼミナールで教科書として採用され、本書と連動したオムニバス講義（全15回講義）のうちの1回の講師を2010年から2019年まで担当した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
市民講座等での講義、講演	随時	十文字オープンアカデミー（十文字学園女子大学主催、2017年7月8日）、一橋大学経営大学院EMBAプログラム（一橋大学ICS MBA主催、2019年6月11日、2020年6月9日、2021年6月15日）、自治体主催のセミナー（千葉県白井市、2018年1月26日：神奈川県茅ヶ崎市、2018年7月8日：茨城県取手市、2019年3月15日、28日、7月31日：宮城県東松島市、2020年1月30日、東京都調布市、2021年11月21日）等で講義や講演を行っている。テーマは「生涯を通じた人間関係や社会参加の意義」「地域デビューのすすめ」「世界の高齢化を学ぶ」等。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許 専門社会調査士	2006年10月1日	認定機関：一般社団法人社会調査協会（認定番号001005）
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				

1「地域包括ケアのまちづくり」	共著	2020年9月	東京大学出版会	千葉県柏市で実施された、高齢者の地域就労と社会参加を促進する「生きがい就労」プロジェクトを紹介した節「生きがい就労の促進」(p59-69)、および、住民の生活相互支援活動「生活支援のシステムづくり」の取り組みに関する節「社会技術の視点から見た生活支援のシステム化と横展開」(p172-184)を分担執筆した。
2「東大がつくった高齢社会の教科書」	共著	2017年3月	東京大学出版会	大学学部生および一般社会人を対象とした、高齢社会および高齢期についての基礎知識を紹介したテキスト。「9章 高齢者の暮らしを支える資源」(p140-152)を分担執筆した。
3「女性のからだとこころー自分らしく生きるための絆をもとめて」(再掲)	共著	2012年3月	金子書房	女性の体と心の生涯を通じた発達、暮らしをテーマにした教科書。「11章 生涯を支える人間関係：人とのかわりに生きる」(p199-218)を分担執筆した。
(学術論文)				
"Social support and participation as factors relating to Ikigai and life satisfaction in lonely older Japanese"	共著	印刷中	Aging International, Online First	(著者)Fukuzawa, A., Sugawara, I. 75歳以上の地域在住高齢者を対象に、ソーシャル・サポートの受領期待と地域活動への参加が、孤独感と生きがい感の関連に与える効果を検討した。孤独感が高い高齢者でも、サポート及び活動参加がある状況では生きがい感を高く維持出来ることが示唆された。査読あり
"Decreased frequency of small talk due to the COVID-19 pandemic has deteriorated mental health: Findings from longitudinal surveys of middle-aged and older people in Japan"	共著	2022年2月	Asia-Pacific Journal of Public Health, Online First	(著者)Murayama, H., Sugawara, I. SNSサービスを利用する中高年者を対象とした2020年3-5月および2021年9-10月の2次に渡るウェブ調査により、雑談の減少が精神的健康に与える影響を検討した。他者との雑談機会がCOVID-19流行以前と比べて減少したと認知している人ほど、精神的健康が有意に低下していた。
"Can online relationships in social networking services supplement offline relationships during the COVID-19 pandemic?"	共著	2021年10月	Asia-Pacific Journal of Public Health, Online First	(著者)Murayama, H., Sugawara, I. SNSサービスを利用する中高年者を対象としたウェブ調査により、オンライン上の知り合いの多さはそれらの知り合いから直接ソーシャル・サポートを得られる可能性とは関連しないこと、また精神的健康の良さに関連するのは知り合いの数ではなく直接的なサポートを得られる可能性であることを検証した。
「地域コミュニティにおけるコミュニティ・エンパワメント評価手法の検討」	共著	2021年4月	西武文理大学サービス経営学部研究紀要, 第38号, 77-90.	(著者)菅原育子・荻野亮吾・久保田治助・堀薫夫 地域コミュニティにおけるコミュニティ・エンパワメントの評価手法および評価尺度に関する研究、開発の動向をまとめ、今後の課題を論じた。
"Retirement and social activities in Japan: Does age moderate the association?"	共著	2021年4月	Research on Aging, 44(2), 144-155.	(著者)Kobayashi, E., Sugawara, I. et al. 全国高齢者パネル調査データを用いて、定年退職の経験と仕事外の社会活動への関与との関連、そのコホート差を検討した。査読あり
「文化的自己観と幸福感との関連について：日本人を対象とした年代別比較」	共著	2021年1月	老年社会科学, 42(4), 327-336.	(著者)福沢愛・繁樹江里・菅原育子 第6回世界価値観調査の日本人データを用い、文化的自己観と幸福感との関連性の世代差を、若年層、中年前期、中年後期、高齢期で比較し検討した。査読あり
「超高齢者研究から見えてきたもの：地域に暮らす90歳以上の暮らしの実態調査から」	共著	2020年3月	老年内科, 1(3), 369-377	(著者)菅原育子・二瓶美里 千葉県柏市に在住の90歳以上全員を対象に郵送調査および自宅訪問調査を行い、超高齢者における生活支援機器や生活支援サービスの利用実態と健康や幸福感、家族や近隣の身近な人々との交流状況を明らかにした。

「高齢者就労：フレイル予防とまちづくりの視点から」	単著	2019年3月	Geriatric Medicine (老年医学), 57, 79-82.	近年、高齢者の就労率は高まり、70歳を超えても働く人が増え、高齢者が活躍する領域も多様になりつつある。高齢者の就労支援に関する研究や実際の取り組み事例を紹介し、地域社会全体で高齢者の働く場づくりに取り組むことの意義と狙いを紹介した。
「高齢者が日常生活において交流している他者との関係：その分類と把握」	共著	2016年10月	老年社会科学, 38, 345-350.	(著者)古谷野亘・澤岡詩野・菅原育子・西村昌記 高齢者が日常的に交流している社会関係について「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者(友人)」の3層に分ける手法を提案し、65歳から74歳の男女33名を対象としたパイロット調査の結果を紹介した。
「高齢者の社会とのつながりと健康及びwell-beingへの経路」	単著	2016年10月	老年社会科学, 38, 351-356.	社会とのつながりを「社会関係」と「社会参加」という側面で整理し、それらが心身の健康とつながる経路に関する理論をレビューした。社会とのつながりと健康の研究にライフコースの視点を取り込むことの必要性を論じた。
"Associations between Social Networks and Life Satisfaction among Older Japanese. Does Cohort Make a Difference?"	共著	2015年12月	<i>Psychology and Aging</i> , 30, 952-966.	(著者) Kobayashi, E, Liang, J, Sugawara I, et al. 社会関係と人生満足感との関連の、世代および年齢による差を、日本の全国高齢者パネル調査データを用いて検証した。対象者の暮らしてきた時代背景や属性により社会関係のはたす役割が異なりうることを考察した。査読あり
"Cross-level interaction between individual and neighborhood socioeconomic status in relation to social trust in a Japanese community"	共著	2014年1月	<i>Urban Studies</i> , 51, 2770-2786	(著者) Murayama H, Arami R, Wakui T, Sugawara I, & Yoshie S. 個人の社会的経済的地位が個人の社会的信頼感に与える影響を、東京近郊都市の20歳以上の住民4123名を対象とした郵送調査で検討した。社会的経済的地位が低い人において、経済的に豊かな地域に住んでいる方が政府への信頼が高まり、近隣住民への信頼が低まることになった。査読あり
「中高年者の就業に関する意識と社会参加：首都圏近郊都市における検討」	共著	2013年10月	老年社会科学, 35, 321-330.	(著者) 菅原育子・矢富直美・後藤純・他 中高年者の就業や高齢期における就業意識が、その他の社会参加行動に与える影響を検討した。千葉県柏市の55歳以上を対象とした調査の結果、フルタイムでの仕事の継続および、現役続行を希望する意識が、仕事以外の社会参加を抑制することが示された。査読あり
「60歳からの社会的役割と主観的well-being」	単著	2013年3月	東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター リサーチペーパーシリーズ, 49, 104-126.	内閣府が実施した「高齢者の健康に関する意識調査」の個票データを二次分析し、60歳以上の人々の、就労、家族内役割、社会貢献役割という3つの社会的役割のバランスと、主観的well-beingとの関連を分析した。
「セカンドライフ就労を介したシニア世代の身体活動量の変化に対する検討：Aging in Placeを指して」	共著	2013年1月	日本未病システム学会雑誌, 19, 107-111.	(著者) 柴崎孝二・飯島勝矢・菅原育子・他 短時間就労が高年齢就労者の健康に与える影響を検討した。12名の研究参加者に、就労開始前から2週間の活動量計測と日記式アンケート調査を行った結果、就労日の活動量や活動負荷が大きくなったのみならず、就労日以外の活動量も変化した。就労が健康維持・増進につながる機序の一つが示唆された。査読あり
「潜在曲線モデルを用いた日本の高齢者の身体的特性の変化と個人差に関する縦断的検討—MCMC法に基づく全国高齢者縦断調査データの解析から—」	共著	2012年11月	行動計量学, 39(2), 43-65.	(著者) 宇佐美慧・菅原育子 日本の全国高齢者を対象とした縦断調査データを用いて、潜在曲線モデルにより高齢者の身体機能およびBMIの年齢に伴う変化パターンを分析した。身体機能とBMIの加齢による変化の男女差が明らかになった。査読あり

<p>“Contextual effect of different components of social capital on health in a suburban city of the greater Tokyo area: A multilevel analysis.”</p>	<p>共著</p>	<p>2011年12月</p>	<p><i>Social Science & Medicine</i>, 75, 2472-2480.</p>	<p>(著者) Murayama H, Wakui T, Arami R, <u>Sugawara I</u>, & Yoshie S 居住地域のソーシャル・キャピタル(SC)と健康の関連を、SCの分類に着目して検討した。東京近郊都市在住の20歳以上を対象とした郵送調査の結果、垂直的SCである組織信頼と、水平的SCである近隣信頼が、居住者の健康に対して異なる影響をもたらすという結果が得られた。査読あり</p>
<p>“Contextual effect of neighborhood environment on homebound elderly in a Japanese community”</p>	<p>共著</p>	<p>2011年5月</p>	<p><i>Archives of Gerontology and Geriatrics</i>, 54, 67-71.</p>	<p>(著者) Murayama H, Yoshie S, <u>Sugawara I</u>, Wakui T, & Arami R 居住環境と高齢者の閉じこもりの関連を、東京近郊の一都市で行われた郵送調査の65歳以上データを用いて分析した。年齢、健康等の個人要因を統制しても、歩いて行ける近隣に店や公共施設などが少ない地域に住んでいるほど、閉じこもりの発生確率が高いという関連が見られた。査読あり</p>
<p>「一般住民における地域社会への態度尺度の再検討と健康指標との関連」</p>	<p>共著</p>	<p>2011年5月</p>	<p>日本公衆衛生学雑誌, 58, 350-360.</p>	<p>(著者) 村山洋史・萱原育子・吉江悟・涌井智子・荒見玲子 田中ら(1978)の開発した地域社会への態度尺度を現代版に改定した尺度を用い、住民の地域社会に対する態度や意識と健康との関連を検討した。20歳以上4123名を対象とした郵送調査の結果、地域社会への態度得点が高いほど主観的健康が良好で将来への不安が低く、孤独感が低いという相関が得られた。査読あり</p>
<p>「高齢化する都市の課題解決を目指して：「柏市地域での暮らしと健康に関する調査」</p>	<p>単著</p>	<p>2011年4月</p>	<p>中央調査報, No. 643, 1-5.</p>	<p>我が国における人口高齢化は都市部の人口集中地域で急激に進行すると予測されている。都市部の高齢化では「人と人のつながり」が希薄であることが、様々な問題の根本に存在すると考えられる。既存の社会調査データを引用し、高齢化によって都市生活の何が課題となりうるかを論じた。</p>
<p>「中高年者の転居パターンから見た地域社会との関わり」</p>	<p>共著</p>	<p>2010年5月</p>	<p>応用老年学, 4, 40-50.</p>	<p>(著者) 片桐恵子・萱原育子 子どもの頃の地域居住経験と現在の社会参加およびコミュニティ感覚の関連を検討した。東京都練馬区および岡山県岡山市の2都市で50歳以上69歳以下を対象とした社会調査を行った。居住経験は現在の社会参加率と関連し、居住経験と現在の社会参加はコミュニティ感覚を高めた。査読あり</p>
<p>「後期高齢者の子どもを対象とした調査における回答者の偏りと傾向スコアによるデータ補正」</p>	<p>共著</p>	<p>2009年10月</p>	<p>老年社会科学, 31(3), 378-389.</p>	<p>(著者) 小林江里香・深谷太郎・萱原育子・秋山弘子・J. Liang 高齢者の社会的ネットワークや支援のやりとりを明らかにするためには高齢者とその子どもの双方からの情報収集は重要である。面接調査に協力した高齢者の子どもへ郵送調査を実施し、回答した子どもの特徴を検討した。傾向スコアを用いたデータ補正についても検討した。査読あり</p>
<p>「中高年期における配偶者との死別後の適応過程」</p>	<p>単著</p>	<p>2008年12月</p>	<p>平成18年度ジェロントロジー研究報告(日本興亜福祉財団), 8, 43-51.</p>	<p>配偶者との死別を経験した中高年者14人への半構造化面接を行い、死別がもたらす心理面および社会生活面への影響を分析した。加えて友人や近隣との関わりが死別後の適応を促す過程を検討した。</p>

「中高年者の社会参加活動における人間関係：親しさとその関連要因の検討」	共著	2007年10月	老年社会科学, 日本老年社会科学 会, 29(3), 355-365.	(著者) 菅原育子・片桐恵子 社会活動への参加が新たな社会関係の形成につながる経路を検討するため、40-69歳の男性950名とその配偶者を対象とした調査を行った。活動に役割などを持ち関与が深いほど他メンバーとの情緒的親密性が高く、活動外での接触頻度が高い関係を持つことを明らかにした。査読あり
「定年退職者の社会参加活動と夫婦関係：夫の社会参加活動が妻の主観的幸福感に与える効果」	共著	2007年10月	老年社会科学, 日本老年社会科学 会, 29(3), 392-402.	(著者) 片桐恵子・菅原育子 定年退職前後の男性の社会参加が配偶者との関係に与える影響を検討した。60-69歳の男性580名とその配偶者を対象に調査した結果、就業の状況や年代により、社会参加活動が本人及び配偶者に与える影響が異なることを明らかにした。査読あり
「中年期・高齢期の発達」	単著	2007年3月	日本児童研究所(編), 児童心理学の進歩 2007年版, 金子書房, 143-170	中年期および高齢期の心理的発達に関わる研究を、2000年以降国内で発表された実証研究を中心にレビューし、今後の研究の方向性を探った。主要な研究領域は「自己の発達」「親しい他者との関係」「社会生活」の3点だった。これらに共通して、喪失の時期とされてきた中高年期を様々な変化への適応の時期と捉えなおす動きが活発になりつつあることを指摘した。
“Suicide in Japan: Present Condition and Prevention Measures”	共著	2005年1月	Crisis, 第26巻1号, 12-19.	(著者) Yamashita, S., Takizawa, T., Sakamoto, S., Taguchi, M., Takenoshita, Y., Tanaka, E., Sugawara, I., Watanabe, N. 日本における自殺の統計と地域での自殺予防への取り組みを紹介した。東北を中心に各地で取り組まれている自殺予防対策や研究活動をまとめ、取り組み間の協力と自殺予防活動に従事する人材育成の必要性を論じた。査読あり
「うつ病の一次予防の取り組み」	共著	2004年7月	ストレス科学, 第19巻1号, 30-39	(著者) 渡邊直樹・瀧澤透・田口学・竹之下由香・山下志穂・菅原育子・熊谷けい子・大山博史・坂下智恵 地域全体で取り組むうつ病の一次予防のあり方を検討した。東北地方の数町で実施した町主催活動への参加者を対象とした質問紙調査、および調査結果を基にした介入プログラム「こころの健康づくり」の取り組み例を紹介した。
「郵送調査における項目欠損の発生要因の検討：高齢者調査を用いて」	単著	2003年12月	社会心理学研究, 第19巻2号, 116-123.	社会調査では、データの信頼性の点で、回収率を高めると同時に項目欠損率を低く抑えることが重要である。60歳以上の一般住民を対象とした2つの郵送調査データを分析し、個人特性よりも質問紙の形態が欠損の発生と関連していること、欠損の多い質問の特徴を明らかにした。査読あり
“Functions of adult friendship in Japan: Friends as a growing bond”	単著	2002年11月	Social Science Japan Newsletter (東京大学 社会科学研究所), 第27号, 14-16.	友人関係が、日本の中高年者の精神的健康とどう関連するかを検討した。50歳以上一般住民への郵送調査と半構造化インタビュー調査を分析し、家族に頼りたくないという人が増加する現在、家族外の関係の役割を含めて成人の社会関係を研究する必要性を論じた。
(学会発表) 2018年1月以降、筆頭発表者のみ				
Neighborhood relationship matters for whom? :Interaction with family structure and functional conditions	連名発表	2021年11月	アメリカ老年学会2021年学術大会.	発表者) Sugawara, I., Kobayashi, E. 全国高齢者パネル調査のデータを用い、地域在住で自立生活を送っている高齢者のなかで、独居でかつすぐに頼れる家族がいない状況にある高齢者ほど、近隣づきあいが主観的well-beingに与える影響が大きいことが明らかになった。

「コロナ禍におけるオンライン社会参加活動の開始に至る経路の心理社会的分析：中高齢者SNS利用者インタビューから」	単独発表	2021年9月	日本心理学会第84回大会.	コロナ禍で様々な社会活動のオンライン化がすすめられた。中高年者の社会活動はどのようにオンライン活動へ移行したのか、またはしなかったのか、そしてその岐路を探ることを目的として、SNS利用者への質的調査を行い複雑経路等至性アプローチにより分析を行った。
「中高年者におけるSNSをととしたソーシャルサポートの受領期待とその関連要因：SNS上の交流と対面交流との比較から」	連名発表	2021年6月	日本老年社会心理学学会第63回大会（老年社会科学 43(2)P23)	発表者) 菅原直子・村山洋史 中高年のSNS利用者を対象として、SNS上で知り合った人からのソーシャル・サポートと、対面交流関係のある人からのソーシャル・サポートの特徴を比較した。結果、SNSのつきあいから得られるサポートと、対面のつきあいから得られるサポートの関連要因は概ね共通していた。
“Companionship with family, friends, and neighbors in later life”	連名発表	2020年11月	アメリカ老年学会2020年学術大会.	発表者) Sugawara, I., Takayama, M., Ishioka, Y. 後期高齢期・超高齢期における親しい他者との交流（コンパニオンシップ）の役割と、加齢による交流内容の変化を、75歳以上の高齢者43名へのインデプスインタビュー調査の質的分析によって検討した。
「中高年者における転職意向の関連要因：ウェブアンケートによる検討」	連名発表	2020年6月	日本老年社会心理学学会第62回大会（老年社会科学 42(2)p130)	発表者) 菅原直子, 今城志保 中高年者の転職や再就職への社会的関心は高まっているが、実際に転職や再就職の意向を持つ中高年者にはどのような特徴があるかは明らかでない。調査会社のモニターを対象としたウェブ調査を行い40歳以上634人のデータを分析した。回答者の年齢により、転職意向と関連する要因に違いが見られた。
「後期高齢者の家族、友人、近隣ソーシャル・サポートの軌跡：3年間の追跡調査から」	連名発表	2019年11月	日本社会心理学会第60回大会.	発表者) 菅原直子・高山緑・石岡良子 後期高齢期における社会関係の経時的変化の個人差および関係性による相違を検討することを目的に、神奈川県川崎市の75歳以上を対象とした3年間の継続調査を行い、家族、友人、近隣関係から得るソーシャル・サポートの変化を検討した。
「多様な働き方への態度とその関連要因」	連名発表	2019年8月	産業・組織心理学学会第35回大会（抄録集83-86)	発表者) 菅原直子・今城志保・檜山篤・秋山弘子 近年進む多様な働き方に関する諸制度や考え方に対する労働者の態度、及び関連要因を明らかにするため、調査会社モニターを対象としたウェブ調査を行った。20-64歳の就労者791人のデータを分析した結果、多様な働き方拡大への関心は概ね高かった一方で、養育中の人や自分の健康に不安を持つ人ほど、主体的なキャリア形成や、ジョブ型の働き方を導入することに消極的な態度を持つことが明らかになった。
「地域在住の超高齢者の暮らしと支援（1）：生活支援サービス利用およびソーシャルサポートの実態」	連名発表	2019年6月	日本老年社会心理学学会第61回大会（抄録集P206)	発表者) 菅原直子・二瓶美里・江原望他 90歳以上の超高齢者の、生活支援技術、サービスの利用実態とインフォーマルなソーシャル・サポートの実態を把握することを目的に、千葉県柏市に在住の90歳以上を対象とした郵送調査を実施した。
「現役世代の抱える「定年後」への不安と準備」	単独発表	2018年9月	日本心理学会第82回大会. 自主企画シンポジウム	日本における定年制度の変容と、定年退職する勤労者の経験や実態を明らかにすることを目的としたシンポジウム（企画：片桐恵子）で話題提供を行った。現在の定年退職年齢前後の人々が持つ「将来の暮らしへの備えと不安感」について、日本全国の50-69歳5000人を対象とした調査データの分析結果を紹介した。社会参加活動を行っている人、情報を積極的に収集する人ほど、将来の虚弱化への不安が高い一方で将来に向けた計画を立てる等の準備行動を行っていることを示した。

「後期高齢者の近隣関係の変化とその関連要因：K2studyにおける20ヶ月後の変化」	連名発表	2018年9月	日本心理学会第82回大会.	(発表者) 菅原育子・高山緑・石岡良子他 加齢に伴う近隣づきあいの変化とその関連要因を明らかにすることを目的とし、川崎市在住の75歳以上を20カ月追跡した調査データを分析した。初回調査時に親しい近隣づきあいがいなかった人のうち1割が、20カ月後の第2回調査時に近隣関係が1人以上に増えた。新たに近隣づきあいを始めた人は、初回調査時の地域への愛着が高く、地域の催しに参加している割合が高かった。
「地域のためにどれだけの時間を割けるか：地域への関与意図とその関連要因」	連名発表	2018年9月	日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会(発表論文集170)	(発表者) 菅原育子・長島洋介・田中紀之・吉田涼子 高齢化により地域活動の人手不足に悩む地域は多く、地域活動非参加層をいかに地域活動に取り込むかが課題である。首都圏の1地域で実施した質問紙調査の回答1098データを分析し、地域のために費やせる時間と関連する要因を探索した。地域のために費やせる時間が月1-3時間程度の人が約半数と最も多く、単発の活動によって住民同士の関わりを持つことの重要性が示された。
「高齢就労希望者のパーソナリティおよび就労に関する意識」	連名発表	2018年9月	産業・組織心理学会第34回全国大会(抄録集91-94)	(発表者) 菅原育子・今城志保 就労者が自分の働き方の特性を理解することは、今後のキャリア選択において重要な情報になる。本研究では高齢就労者の就労に関する経験や意識、就労に関連するパーソナリティを評価する尺度の開発を試みた。高齢就労希望者向けセミナー受講者98名への調査結果から、計7因子39項目からなる尺度を作成した。
「孤独感の関連要因：時代による相違に注目して」	単独発表	2018年6月	日本老年社会学会第60回大会、自主シンポジウム	全国高齢者パネル調査を用いた分析例を報告するシンポジウムにて、「孤独感」データの分析例を報告した。1987年、1999年、2012年の3つの時代の高齢者の主観的孤独感を比較し、1987年の女性の孤独感が最も高かったことを示した。また孤独感の経験が時代により異なりうることが明らかになり、30年以上にわたる長期調査で比較する意義が示された。
(その他) 報告書、コラム、書評等				
報告書「国立国会図書館科学技術に関する調査プロジェクト2020報告書：高齢者を支える技術と社会的課題」第1章及び第6章	第1章(共著)、第6章(単著)	2021年3月	国立国会図書館調査及び立法考査局 調査資料2020-6	第1章(著者) 菅原育子・二瓶美里「高齢者の暮らしを支える技術の現状と社会的要請」高齢者支援技術の定義、歴史的変遷、高齢者の生活ニーズの変遷と今後期待される技術の姿に関する考察を行った(p1-21) 第6章(単著) 『課題のまとめと今後の政策オプション』高齢者支援技術に関する技術的、社会的、法的、倫理的課題を6点にまとめ、その解決のための提言を論じた(p99-103)
報告書「高齢者の家庭内外での活動の類型化と5年後の健康および主観的well-beingへの影響」	共著	2020年1月	東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム(編)『高齢者の健康と生活に関する縦断的研究—第9回調査(2017) 研究報告書—』, pp25-43.	(著者) 菅原育子・小林江里香 日本全国の60歳以上を対象とした縦断調査の第8回及び第9回のデータを用いて、高齢者の家庭内外での活動を潜在クラスモデルにより類型化し、その類型と、5年後の健康、身体機能自立度、主観的well-beingとの関連を検討した。
コラム「高齢者の健康・心理・社会的側面の横断的・縦断的变化におけるコーホート差の研究」	共著	2017年3月	理論と方法, 数理社会学会, 32, 194.	(著者) 小林江里香・菅原育子・秋山弘子 日本の60歳以上高齢者を対象とした1987年開始の長期パネル調査を用いた研究プロジェクトを紹介。高齢者の社会関係に関するコーホート差を分析する方法的、理論的難しさ、データの構造の複雑さを活かした課題の立て方、分析の仕方について論じた。

<p>コラム「平均寿命と平均余命」</p>	<p>単著</p>	<p>2016年6月</p>	<p>柏木恵子・高橋恵子（編）『人口の心理学へ-少子高齢社会の命と心』，ちとせプレス，198-199.</p>	<p>平均寿命と平均余命の定義、考え方の説明を行った上で、健康寿命の定義や算出方法に関する議論を説明した。また、健康寿命の延伸を希求する一方で、要介護の時期を心豊かに生きることについても考える必要があることを指摘した。</p>
<p>書評「高齢者研究の立場から」（「書評シンポジウム」今津孝次郎著『人生時間割の社会学』）</p>	<p>単著</p>	<p>2011年6月</p>	<p>児童心理学の進歩2011年版，金子書房，352-356.</p>	<p>高齢者の社会関係を研究する立場から今津孝次郎著『人生時間割の社会学』の書評を行った。ライフステージ研究とライフコース研究の比較、中年期と老年期の間に「向老期」を置いて議論することの意味、向老期・老年期特有のライフイベントを研究する意義について論じた。</p>